

古典との対話を通じて自己を問い直す授業実践の構築

田中宏幸

一 はじめに

本学会では、二〇〇七年度から協議会のテーマとして、「読むこと」の領域における学習指導の問題を取り上げ、「読む力」を育ていくために、教材をどのように解釈し、授業に生かしていけばよいのかという議論を始めた。二〇〇七年度は「小説教材」、二〇〇八年度は「説明的文章教材」を取り上げ、今年度は「古典（古文）教材」について検討することとした。

折しも二〇〇八年三月（高校は二〇〇九年三月）に公示された新学習指導要領において、「言語活動例」が各領域の「内容」に位置づけられるとともに、「言語事項」と呼ばれてきたカテゴリーが「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」に変更された。この変更によって小学校においても古典が扱われることになったのである。これは、中学校以上の国語科における「古典」教材の扱いに少なからぬ影響を与えることになると思われる。

では、これからの中学校・高等学校における古典教材の学習指導

においては、何がどのように変わるのか。どのようなことを意識して日々の授業を営んでいったらよいのか。どのような学習指導のスタイルを求めているべきなのか。こうした点を中心課題として、協議が進められることとなった。

二 実践報告・提案の特徴と問題意識

1 武久康高氏の場合

武久氏が取り上げるのは、高等学校新学習指導要領「国語総合」の「読むこと」領域において「言語活動例」として挙げられている「作品の読み比べや批評」は、どのような教材を用いることで、より効果的に展開できるか、という問題である。そして、その教材化の観点として「人生の局面を切り取ったパターン認識」を取り入れてみたいと提案する。

例えば、「恋」の物語であれば、「女を盗む／女と逃げる」という定型で表現されているものが少なくない。例えば、伊勢物語第六段「芥川」、今昔物語巻二七―七、大和物語第一五五段「山の井の水」、

源氏物語「若紫」などを読み比べていくことで、古典の世界のパートナーを知ることができる。さらに、詳細に検討し、そこにはどのようなバリエーションがあり、それぞれの作品中でいかに意味づけられているかを探ることによって、ものの見方を豊かにすることができる、という教材開発の提案である。

2 間瀬由美氏の場合

間瀬氏は、半年間（二八回）をかけて、高校一年生の「朝プリント学習の時間」を活用し、帯単元として『竹取物語』全文を読む実践に取り組んだ。これは、絵本とは異なった原作の魅力に出会わせ、当時の価値観の中にある語り手と今の自分とを対峙させようとする試みである。

通常の授業とは異なる読み方、いわば「連続ドラマ」風に少しずつ読んでいくには、プリント作りにも数段の工夫が要求される。内容の区切り方、見出しの示し方、口語訳の扱い、内容理解の問題づくり、通常の授業と関連づけた文法事項の確認に工夫を凝らし、学習意欲を持続させながら、最終的には作品全体を論じられるように導いていくのである。

この学習によって『竹取物語』に関心を持った生徒たちは、文化祭で「くらもちの皇子」を中心にシナリオ化し、上演していったという。作品に魅力を感じた生徒たちは、自発的に表現活動に展開していったのである。

3 金子直樹氏の場合

金子氏は、古典の学習の意義を、「古典の情緒が分かった」ということで終わりにするのではなく、「テキストと自分との関係を見出し、自己を問う契機となる」ことに求めている。そのために、多くの章段を重ね読むという方法を取り入れる。

例えば、『枕草子』第二五段「すさまじきもの」によって、類聚的章段の「文体」（共通感覚の項目列挙から清少納言自身の経験や観察に基づく感覚へという構成）を発見させた上で、それを他の章段（第七五段「ありがたきもの」、第二七六段「うれしきもの」、第九五段「ねたきもの」、第二二五段「むとくなるもの」など）にも応用させていく。このような重ね読みによって、清少納言の感覚や表現をとらえさせていく工夫（比喩的に言えば、古典を差し出す「手つき」の問題）が大事だという。

こうした学習の成果は、毎時間の担当者が記録する「生徒学習記録」に如実に表れる。さらに、その記録を次時に紹介することによって、各自が自分の問題と引きつけて考えるようになっていく。金子氏は、どの学年においても、数多くの古典と出会わせ、発見したことを自由に発言するように導いていくのである。

三 協議の実際

上記の提案を受けて、次の六点が協議の柱となるのではないかと想定された。

第一、古典の学習指導で、何をめざすのか。

第二、古典を読むとは、どのような行為なのか。

第三、どのような学習材を選択し、組み合わせるか。

第四、読みの構えをどのように持たせていくのか。

第五、理解したことをどのように表現に転化させるか。

第六、語彙や文法等の習得をどのように行っていくか。

しかし、実際の協議においては、武久氏の「古典学習によってパターン認識を獲得させることを目的として、教材を組み合わせていけばよいのではないか」という提案を軸に、議論は広がっていった。

武久氏の提案に賛同する意見は、藤井氏（平取高）から出された。

「古事記」のイザナギ・イザナミ神話と「桃花源記」（陶淵明）の共通点を生徒たちが見出し、古典に親しむようになったという事例を踏まえたものである。

一方、信木氏（尾道大）からは、「今も昔も一緒だと考えてパターン・類型性があると理解するのではなく、差異の部分こそ意味があると捉えるべきではないか」という異議が出された。また、「作品というものは、パターンを踏まえながらも、意図的にずらしていくことによって創造されていくものではないか。そのような『ことばの働き』そのものを学ばせていくべきではないか」という提案も加えられた。

この議論はさらに「古典の作品相互あるいは古典と現代との共通点・差異点を、誰が発見するのか」という学習指導の仕掛け方の問題に発展していく。例えば、金子氏は、「生徒たちは最初は『古典は分からない』というが、類型的に捉えやすい教材を重ね読みさせていくと、自分の力で読み解くことができるようになっていく。その

仕掛け方が重要だと思われる」と述べる。また、間瀬氏は、「生徒たちは最初のうちは『徒然草』に違和感を覚えても、時代の価値観の中で揺れている人間という点では同じだということに着目させると、わかってくれるものだ」と指摘する。

これに対し、現代の学習者の実態から問い直すべきではないかというのが出雲氏（県立広島大）である。「今の子どもたちは、何事に対しても大まかなパターンでしか捉えられなくなっているのではないか。そういう子どもたちに対しては、表現を微細に見ていくことも疎かにできないのではないか」と指摘する。方法として「型」を見ていくだけでなく、生活と結びつけていく形で授業展開ができないかというのである。

また、山元氏（広島大）からは、「学習者は古典とどうやって出会っていくのだろうか」という問題提起がなされた。新学習指導要領では小学校から多くの古典と出会うことになる。それを前提にして、中・高校ではどのように深めていくかということが問題となる。そこを明確にしたいという提案である。

以上の議論を受けて、村山氏（附属福山中高）は、「差異の発見ということと自分の生活の見直しとは、少し隔たりのあるのではないか。例えば、間瀬実践で、生徒がかぐや姫を小悪魔的な存在と捉えている点に少し違和感を覚える。かぐや姫の結婚拒否は、彼女の抵抗と読むべきではないか。」という見解を述べた。

また、菅原氏（文教女子大）からは、「古典学習をパターンの習得で終始させてよいのか。古典教育の意義は、作中人物や事件との出会いを保証し、それを切実感のあるものとして受け取り、人生経験

の一つとしていくことにあるのではないか。」という指摘がなされた。

四 協議のまとめ

以上の協議を通して検討され、今後の実践課題として明らかに
なったことは、三点にまとめられよう。

第一は、古典とどのように出会わせるかということである。作品
と出会うときには、いったん作品に同化していくことが必要である
が、その手立てをどうするかという課題である。

第二は、作品を対象化し、「批評」の観点をもって見る経験をどの
ように作り出していくかということである。言い換えれば、ただ単
に、共通点や差異点を見つけ出すことにとどまるのではなく、作品
との対話が自己の問い直しにつながる実践をどのように作り出して
いくかという課題である。

第三は、一つだけの教材を精読するだけでなく、複数の教材の組
み合わせのなかで新しい授業づくりをするには、どのような単元づ
くりが適切かという課題である。

こうした実践課題を解決していく方向性を、どこに見出せばよい
か。そのヒントは、竹村会長による閉会挨拶に潜んでいると思われ
る。竹村氏は、次のようにまとめる。「今日の提案に共通しているの
は、批評するためには、読まなければ駄目だということではないの
か。物語のパターンは認識のパターンでもあって、過去から現在へ
つながっているという側面を持つ。と同時に、先人は、パターンそ
のものを更新していく過程で新しいものを創造してきた。この多く

のパターンを知ることによって、私たちは古典の世界全体について
見通しを持つことができる。もちろんこれは古典に限ったことでは
ない。現代文学や現代社会についても同じであろう。しかも、多く
を読ませていけば、生徒たちはいろいろな自由と自由に語り始める。とき
には劇にまで仕上げられていってしまう、というのが今日のご報告だっ
たのではないか。このように、これからの古典の授業では、いかに
古典そのものの情報量を増やしていくかということが課題となろう。」
このまとめにもあるように、これからの古典教育では、いかに多
くの作品と出会わせていくかということが問われるに違いない。古
典の作者（あるいは語り手）が、それぞれの時代状況の中で追究し
てきた問いに出会い、その問いを共有することによって、現代の状
況が見えてくるということに古典学習の意義を見出していきたいも
のである。折しも、本学会の一週間前に開かれた日本国語教育学会
全国大会における提案授業「テーマで比べて読む古典」も、中学二
年生を対象に二八編もの作品を読ませるといふものであった。こう
した授業例等に学びながら、古典に親しみ、古典の本質に迫る授業
開発を心掛けていきたい。

※協議会における各氏の発言記録は、稿者が要約したものである。

文責は稿者にある。ご了承ください。